

医心 伝心

脳卒中は進化の代償？

県医理事 平野八州男

脳卒中とは、血管が破れたり詰まったりしてその先にある脳細胞が死滅する病気です。脳卒中は人類の宿命のような病気ですが、この原因は脳の肥大化であり脳血管がその肥大化に追いつけなくなったことが原因とも言われています。脳の進化が早すぎた結果だそうです。

脳の大きさが一気に巨大化したのは約200万年前からだと言われています。この時期人類は石器の使用を始めており、その結果脳の大きさがチンパンジーの3倍程度まで大きく拡大しました。そして、この脳に血流を運ぶために毛細血管が細部にまで張り巡らせ、その距離は約600kmにもなったと言われます。

しかし、残念なことに脳の血管の厚さは体幹に比べ、それに応じて厚くはなりません。手足を動かす運動野に血液を供給しているレンズ核線状体動脈と言われる毛細血管に対して強力な圧力が加わるようになり破裂しその先の運動野をつかさどる神経細胞を死滅させ、手足の麻痺や顔面の硬直、会話障害を引き起こす事になります。

脳卒中が多発し始めたのは、今から6万年前でそれ以前にはほとんど人類には、縁のない病だったそうです。6万年前といえば、人類が、アフリカ大陸の地を旅をしてヨーロッパ、アジア、アメリカに移動し始めた時期であり、アフリカには塩の取れる場所が少なく、そのため人類は塩に対する渴望のような遺伝子がセットされ、本能的に塩を求めるのだと言われているとのこと。今でもアフリカで太古のままの生活をしているピグミー族には脳卒中は無いそうです。現代人も塩分制

限をし、もちろん肉類、油など血流の流れを阻害する問題を取り除ける生活をすれば、6万年前から始まった脳卒中を予防できるのだそうです。

世界的にみると最近の脳出血に関する民族間での発症率の違いで、白人系(24.2%)、黒人系(22.9%)、ヒスパニック系(19.6%)と比べ、アジア人の発症率は51.8%と実にその他の人種と比べて2倍近い高い結果となっています。

日本人の脳卒中の危険因子は時代とともに変化しており、最近では、危険因子を複数有する患者が増加しており、程度が軽くても多数の危険因子が集積した患者では日頃からリスク管理を徹底し発症を予防することが重要です。高血圧治療の進歩普及により、脳卒中発症率、死亡率は低下傾向にありますが、適正な降圧管理下にある方は、8分の1にも達していない状態です。また、糖尿病や脂質異常など代謝異常は急激に増加しており、今後さらに強く出てくると予測されています。食生活の是正、代謝性疾患の早期発見と管理、高血圧治療の徹底が脳卒中の予防に不可欠であると思われる。

富山県では、平成3年7月より「脳卒中情報システム」事業を始めており地域における脳卒中患者の発症と経過に関する情報収集をし、患者の実態把握、対策に関する事業を行っております。

医報とやまにも4半期毎に医療機関からの届け出件数を掲載し件数状況と会員への届け出促進を図っております。今後高齢化を向かえるにあたり脳卒中に直面する方達のためにも、これからもこの事業システムへの御協力をお願い致します。